

第十七話

御厨三郎事

『前太平記』上 卷第三 五十二頁から五十四頁より

まもなく平三郎兼任は、すぐに父の居城である土浦(巻)に来て将門の謀叛の詳細をお話し申し上げられると、国香はたいそう驚きなさって、「これは思いがけない一

「こは思ひ寄らぬ珍事かな。

大事だな。私はこの国に住んでその上で懇意にある一族の陰謀を知りながら、もし

我当国に住して、 爾も親しき一族の陰謀を知りながら、 如し

このことをおろそかにしたならば、日本国中の大惨事、人民の苦しみ、朝廷に向か

是を忽せにせば、 国中の騒動、 人民の苦しみ朝家に向かひ奉り、

い申し上げ、（世間に向ける）どんな顔があるだろうか。まだ事態が大きくなって

何の面目か有るべき。 未だ事の微なる中に、

いなくうちに、早く退治するのがよい」と言って、あちらこちらの家臣を集められ

速やかや退治すべし」

たが、急なことであるので、国境を隔てている者は一人も参上しない。稲石_(貳)・府中_(参)・中村_(肆)・宇志久_(伍)・赤芝_(陸)・藤代_(漆)などをはじめとして、合わせて千百騎余り、長男上平太貞成はちょうど在京中で居合わせず、次男繁盛、三男兼任を両大将として差し向けられる。兼任は五百騎余りを分けて、城から三里ほどに出陣して、宇志久野に陣をとり、繁盛はわざと五十町余り後退して軍勢を潜ませる。これは敵を出し抜いて誘きこんで挟み撃ちにして討伐しようとするためである。

そうこうしているうちに十一月七日、御厨三郎将頼が掲げた旗を進め（→進軍

旗の手を進め、

し）、馬煙を立ててやってきたが、兼任の軍勢は宇志久野に陣を取って、射手を左右に進めて待ち受けた。敵はここまで出陣しようとは思ってもしなかったもので、諸軍は驚き騒いだのだった。しかし、敵はわずかの小勢であるので、どれほどのことがあるだろうかと思って、法螺貝と鉦を鳴らし、始めに鬨の声を上げさせた。兼任の兵も盾の板を叩いて同じく鬨を合わせるように挙げたのだった。はじめは互いに足軽の射手を出して、激しく矢で戦をしたのだったが、どの者も東国育ちの武士共であるので、どうして少しもぐずぐずすることがあろうか、太刀や長刀の先端を並べ、勢いをつけて一斉に打って出て、火花を散らして戦った。兼任はしばらく持ちこたえて、「今は敵の人馬もきっと疲れただろう。攻め時はちょうどいい」と思

「今は敵の人馬疲れなん。

時分は能きぞ」

い、合図の鼓を鳴らし、東を目指して後退する。将頼勝ちに調子づいて、逃げる軍勢を追うこと三十町余り、後陣に潜んでいた繁盛の軍勢、八百騎余りを三手に分け、風が起きるように、同時にぱっと寄せ合わせ、真ん中に追い囲み、一人と逃すまいと攻め込んだのだった。将頼の軍勢は確かに大勢であるといっても、繁盛の計略に囲まれて、諸卒は陣形を取りかねて、全員我先にと引き返す。兼任の兵は軍を乱し、十方分かれて追ったけれども、むやみに遠くまで追いつけるのも無駄であると思って、勝鬨をどっと上げさせて、土浦へと帰って行ったのだった。

注釈

※壺・父の居城である土浦……現茨城県土浦市中央一丁目の亀城公園に土浦城跡がある。この土浦城は平将門がこの地に城郭を作ったと伝承される。

※貳・稲石……不明。稲敷のなまりかと推測。

※参・府中……鎌倉時代からみられる地名。霞ヶ浦の北西。

※肆・中村……常陸国内の古い地名の中の、「中村」という地名は、昔の真壁郡（筑西市一部・下妻市一部・桜川市一部）、那珂市一部にあったようである。そして、土浦市南西部にも現在中村町がある。

※伍・宇志久……現牛久市。

※陸・赤芝……不明。しかし、鹿嶋市に明石という地名や、現在の城里町に昔あった桂村という村に赤沢という地名があったことが確認でき、それがなまったものと推測するが、断言はできない。

※漆・藤代……現取手市。

(参考文献：「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 8 茨城県』角川書店 1983年)

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2016/2/1

改訂：2021/3
海熊童子

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※